書評 鄭勝謨『市場の社会史』(朝倉敏夫 監修/林史樹 訳)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24517/00000389

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



書　評

鄭勝謨『市場の社会史』

（朝倉敏夫 監修／林　史樹 訳）

鶴　園　　裕

本書は，法政大学出版局から出ている《韓国の学術と文化》シリーズの一冊として翻訳・出版された。このシリーズは，1999年に始められ，「韓国の歴史・社会・文化について，韓国の研究者によって書かれた第一級の学術書の翻訳シリーズ」（刊行のことばより）と銘打たれている。確かに幅広いジャンルの作品が，ジェンダー論や，韓国ではベストセラーとなった文化遺産踏査記と呼ばれる旅行記まで，すでに10冊を超えて出版されている。書名リストは30冊を数え，原注・訳注・索引などを含めて600頁を超える大著から，本書のように写真や図版も多く，200頁内外の比較的手にとりやすいものまでさまざまである。

ただし，そのことが本書のような作品の場合，読者にとっての理解のたやすさを保証することにはならない。評者自身もこのシリーズのある一冊を翻訳し，歴史用語や固有語の翻訳の難しさ，原著者独得の言語感覚のこだわりに苦労した覚えがあるので，まずは翻訳者の林史樹や監修者の朝倉敏夫の苦労を多としたい。したがって本書の書評のような場合には，原著そのものが持つ問題点と，翻訳によって生じる問題点を分けて考える必要があるが，一方では原著と翻訳の関係性から生じる別の問題も存在するので，そのあたりから考えてみようと思う。

まず，原著と翻訳の関係性の問題と思われるひとつは，翻訳の底本が，92年に出版された『市場の社会史』（熊津出版）と2000年の『市場から見る私たちの文化の話』（熊津ドットコム）の二つであることである。書名は旧版から取り，内容は新版からとられたことは，原著者自身による「日本語版への序文」や「凡例」からも分かる。ところが，原著者が従来，商業に関する自由と解釈されてきた「乱廛権」に関する解釈を，旧版から新版においてその禁止の権利と変更し，それに関連して「禁乱廛権」という間違った用語と「日本語版への序文」で力説しているにもかかわらず，本文の42〜43頁の該当部分の翻訳による記述や「乱廛権」に付された訳注を読んでも，その変更前と変更後の意味が混用されているようで，かえって理解が混乱することである。したがって凡例の二で「これまで用いられてきた『禁乱廛権』という用語は全く逆の意味をもっていたのである」という「但書」をつけても，歴史用語としてそうなのか（評者の理解では朝鮮王朝当時そのような用語が用いられたとは思えない），概念用語として誤っているとの判断なのかが曖昧であるために，一般読者としては本書の冒頭から専門用語のスコラ的解釈に悩まされることになる。韓国での本書の位置が，「できるだけ平易に書こうと努力した」とされる「韓国の生活と風俗」シリーズの一冊として，本来的には固い単行本の学術書として出版されたものではなく，どちらかと言えば注も付けられていない一般書として出版されたのであろうことを考えれば，これは法政大学出版局の『学術と文化』翻訳シリーズに移されたことによって起きた問題と言えるかも知れない。

本書は全体として，朝鮮王朝後期（日本の江戸時代にあたる）から形成された農村の定期市（オープンマーケット・野市），在来市場の展開を前提として，今日も存在する農村の定期市場の状況を，主として文化人類学や地理学，歴史学の手法で描くものである。図版や写真が多くて手にとりやすいとは書いたが，その図や写真のキャプションを読みながら眺めていると，いろいろな疑問点や問題点を感じる。

たとえば，巻頭に置かれた朝鮮王朝後期の金得臣による「帰市図」とされる絵は，おそらく個人蔵の一枚であろうが，そのようなクレジットがない。「市にでかける人々」とキャプションにはあるが，表題からするならば，市から帰る人々であろう。季節も夏とあるが，同じような構図を別のある歴史書ではまったく別の解説をつけて利用していた記憶がある。絵図を利用するのは，具体的なイメージを想起するのに確かに便利ではあるが，この絵に何らかの賛や題箋が付されていなければ，市に向かうのか，帰るのかも含めて，正確なところは不明であろう。

続いて第2図の「紅桃源全景」という写真のキャプションでは，祭タプという単語が，おそらくは訳注であろう「祭祀に用いる穀物をつくる畑」とカッコ書きで説明されている。タプは朝鮮語の固有漢字で「畓」と書き，文字通り水田の意味である。畑（この漢字は日本の固有漢字，いわゆる国字）にはパッという別の固有語があり，漢字表記は「田」の一字である。一見ささいなことであるが，祭祀用の水田であるのか畑であるのかは，祭祀の費用を何の穀物でまかなうのか，おおげさに言えばその地域の伝統的な農業生産力を考える上でも，大事な問題ではある。写真からは山がちの荒れはてた畑地のようにしか見えないが，かつては丁寧に作られた水田が展開していたであろうことまで，「畓」の一字からは想像される。また，キャプションでは「褓負商たちの基地」とあるが，墓地の誤植であろう。

写真は主に大韓帝国（1897〜1910）末期から植民地期，そして南北分断後の1987年頃までの韓国のものが多用されているようであるが，いずれにせよ，図や写真が豊富なだけに，図の作成年代や，写真の撮影年代などを含めて，適切な説明がないと，思わ

ぬ誤解を生みかねない。

たとえば51頁に掲げられている平壌の「広通社証票」は，表が日本語，裏が朝鮮語で表記された興味深いものであるが，通貨単位は「五両」という旧通貨単位であり，貨幣も白銅貨とあるから旧韓国，どう考えても大韓帝国期に発行された白銅貨による表記と考えるべきものである。ところが写真のキャプションでは，「植民地時代に通用した会社債のひとつの様式」であるとか，「日本の貨幣である白銅貨と交換するという内容が書かれている」などという理解に苦しむ解説がなされている。日本語が書かれていれば，即「植民地時代」と判断するような歴史に対する無理解を示すようで，第二章の「韓国の市場の歴史」の中に置かれているだけに，図や写真に対するキャプションには注意が必要であろう。

今日の韓国は，農村を含めてすさまじい変化を遂げている。1980年代を境として，交通の発達とともに農村になくてはならない在来市場としての定期市の本来的な意味は喪失した。全体としては過去形で語るべきであろう在来市場が，写真や図を見る限り，現在も変わりなく健在であるかのような印象をうける。本書の原著者は，本書本文の印象や結論部分の最後の一行，「わかっていることは，かれら（農民と零細商人，評者注）の運命が彼ら自身の考えや希望とは関係なく，外部に存在する権力を持ったものの利益のために決定されるという点だけである」（180頁）という一文から判断すると，少なくともそのような立場ではないように読みとれる。

いささか本作りとしての図版や写真にこだわりすぎたようである。本来書評が果たすべき原著書の問題や翻訳の問題を簡単にのべたい。巻末の著者紹介によれば，著者の鄭勝謨は，1954年の生まれで，ソウル大学校の人類学科の出身，現在は地域文化研究所所長および韓国歴史民俗学会常任委員として活動とある。おそらくは歴史畑ではないという著者の研究領域や，本書がもともと一般読者向けの啓蒙書であって，必ずしも単行本の学術書をめざしたものではないという性格によるのであろうか。引用書の出典表示などが原則的でないことに，最初から最後まで不満が残った。

たとえば第一章冒頭部分，「過去の田舎市場の姿はどのようであったか」を記述するくだりで，「外国人キャンベル」の文章や「イザベル＝ビショップ女史」（本文表記ママ）の記述をかなり長文にわたって引用している。しかし，どちらにも出典の記述と年代の表示がない。記述それ自体は開港期以降（1876年～）の田舎市場の様子を活写している。どちらの引用にも市場に並べられた外国商品の事例として，アニリン染料，日本製のマッチ，ベルリン青（紺青）などが並べられている。「外国人キャンベル」については，韓国では宣教師などとして知られているのであろうが，何国人なのかも含めてよく分からなかった。このままでは（韓国ではよく知られているのであろうが）出典不明の回想資料というしかない。イザベラ・バード・ビショップの著書は，ひとつは平凡社の東洋文庫からイザベラ・バードの『朝鮮奥地紀行』として朴尚得の翻訳で出されており，もう一点は時岡敬子の翻訳でイザベラ・ビショップの『朝鮮紀行』として図書出版社から出されている。

原書は1898年の出版になるイギリス人女性の同一人物の書物の翻訳で，原題をより忠実に翻訳すれば，「朝鮮とその近隣諸国」となるであろう同一著作の翻訳である。1894年から97年頃までの朝鮮やロシア領沿海州，中国東北部などの記述も含んでいる。

本書に引用された「田舎市場」の記述は，イザベラが第2部26章の「松都から平壌へ」向かう道中で目撃した定期市場の状況で，訳語の違いはあれ，同一の箇所から引用されていることはまちがいない。英語の原文に直接あたったわけではないので，どのような訳語がふさわしいのか，私には判断がつかないが，いずれにせよ，朝鮮の内陸部でかなりの外国製品が好まれ，いろいろな商品が在来市場で売られていたことが，商品目録からして判断できる。このような記述の場合，原著に出典の表示がなくても日本語訳が2種類も出ているのであるから，何らかの注が補われるべきであろう。というのは，直後の引用資料である林炳茂の『チャンナル』については本文中の割注の形で，「市日」という訳語や1983年という出版年，32～33頁という引用頁数まで補っているからである（14頁）。その他，ロシア大蔵省から刊行された『韓国誌』は，本文に1905年と注記され

(15頁)，巻末の第一章に関する参考文献でも「露国大蔵省編1905」としているが，正確には1905年に出版されたのは，日本の農商務省山林局の日本語抄訳本で，ロシア語原本の記述はそれ以前，おそらくは1890年代の記述であろうことも注記されてよいことであろう。

これ以外にも出典表示に関する疑問や不満は山ほどあるが，原著者の歴史畑ではない文化人類学という学問的態度からくる性格や，原著の一般書としての性格，あるいは訳注をつけた翻訳者がどのような読者を想定して訳注を付けているのかという問題に絡むので，これ以上はあまりくどくど述べない方がよいであろう。ただ中国の在来市場を研究したスキナーの名前が本文には2回も登場して索引にも取られているのに，参考文献に『中国農村の市場・社会構造』の書名があげられていないこと（日本では1979年に法律文化社から今井清一らによって翻訳・出版されている），また本書の内容と深く関わる「伝統農民社会の市場が定期性を帯びる理由」(62頁）や通婚姻圏と市場圏との関連を論じたくだり（176頁）で，スキナーを引用しているのであるから，原著が引用箇所を明示しないのであれば，翻訳者が同じ分野の研究者であるならば，もう少し学問的で丁寧な訳注を付けるという工夫があってもよかったように思う。いずれにせよ，東アジアの朝鮮・日本・中国という伝統農村社会における定期市場の共通性と相違点という興味深い観点が浮かびあがるのであるから，それを生かす工夫ということが，日韓の「学術と文化」の交流をめざすこのような翻訳者の場合，必要な態度であるように思える。

何やら自分自身も感じていた翻訳者の労苦を考えず，読者としての不満や注文ばかりを述べたてたようなものになってしまったが，朝鮮史研究者としての評者も興味深い図版や写真，また味わい深い本文から学び，啓蒙されることも多かった。たとえば多くの「屋根がけ」をほどこしたチャント（市場）の図や写真から，なぜソウルの南大門市場や東大門市場のような巨大市場においても家屋付きの商人と露店商人が混在しているのかという問題を考える端緒はつかめた。また，22頁の「市場はなぜ発生したのだろうか」の設問には，中国の古典『孟子』の一節を引用して自給自足のアウタルキー経済を否定して分業を肯定する儒教思想の中に，儒教の経済思想を読みとろうとする観点は興味深かった。このような観点は，「隠者集団」を否定する『論語』の中にもすでに読みとれる話であるが，ただし，この場合は必ずしも商業的行為の肯定とは受けとめられない。むしろ実業に携わらない治者としての士大夫，官僚として政治にのみ参与することの自己肯定として受け止められてきた。朝鮮の儒者の場合，実際はどうであったのか，興味深いところである。通説では，農本的な朝鮮の儒者，儒学者，官僚は，市場を含め商業的な発展に対しては否定的であったというが，たとえば『論語』子罕第九で（岩波文庫版，174頁），子貢の「美しい玉」のたとえを「箱にしまわず売ってしまう」と答えた孔子の逸話などを，朝鮮の儒学者はどのように解釈してきたのか。一度，朝鮮儒学の研究者に聞いてみたい欲求に駆られた。

いずれにせよ，本書の欠点はあげつらえば山ほどあるが，それにもかかわらず朝鮮の在来市場の雑然としたエネルギーをそのままもちこんだような，雑多な詩歌やことわざ，記述の引用こそが本書の本来の原著のもち味なのであろう。それらの魅力のすべてを日本語で移そうとした翻訳者と監修者の労苦に再度思いをいたせば，いささか今風の俗な表現を借りれば，「ゴーマンかましてしまったか」との思いで首をうなだれつつ，朝鮮研究者として翻訳という同業に携わった者としての反省をこめつつ，本書への拙い書評を終える。

(法政大学出版局，2002年6月刊，A5判，204頁，3000円)